

Flush における「匂いの世界」

大西祥恵

1. はじめに

Virginia Woolf の小説 *Flush* (1933) は、イギリスの詩人 Elizabeth Barrett Browning が飼っていた愛犬 *Flush* を主人公にしたもので、副題にあるように、フラッシュの架空の「伝記」という体裁をとっている。『フラッシュ』や、同じく「伝記」という副題のついた *Orlando* (1928) をはじめとして、ウルフは史実に基づいた男性中心的な従来の「伝記」とは異なる形の伝記を描こうとした。こうした試みに加え、ウルフが多くのテキストの中で光を当てているのが、歴史の中に埋もれた日陰の人々の人生いわゆる「無名なものの人生 (Lives of the Obscure)」である。例えば *Mrs Dalloway* (1925) では、政治家の妻、*To the Lighthouse* (1927) では学者の妻の思考と感情を浮き彫りにしている。

『フラッシュ』は、女性たちと同様に日陰の存在である犬の「伝記」として書かれたもので、単に詩人エリザベス・ブラウニングの飼い犬という所有物ではない、フラッシュ独自の人生に光を当てている。ウルフは『フラッシュ』をブルームズベリーグループの一員であり、著名な伝記作家である Lytton Strachy の伝記の「パロディ」とし、Browning 夫妻の恋文の中に登場したフラッシュに「命を吹き込んだ」のである (*Letters*. 161-162)。

Quentin Bell は、『フラッシュ』が「動物を愛する人によって書かれた小説というよりは動物になりたかった人によって書かれた小説である」(175) と述べているが、この小説でウルフは、人間の視点から動物を観察するのではなく、動物と一体化し、動物の視点から動物の感じる世界を生き生きと描き出している。¹

Jacques Derrida は、*L'animal que donc je suis* (『動物を追う、ゆえに私は(動物)である』) でこうした動物の視点について分析し、西洋社会がいかに人間中心的な観点から動物を人間より劣ったものとみなしてきたかを検証し、人間中心主義に対する絶対的な他者としての動物の視点の重要性について訴えている。デリダはそうした動物の視点について考察するきっかけとして自らの裸体を飼い猫に見られた経験をあげ、動物という他者のまなごしを通して「人間的なもの」の限界を見つめ直した(33)。

動物を主人公にした『フラッシュ』においても、人間中心主義の中で排除されてきた動物の思考を描き出している。犬の架空の伝記を描くために、ウルフは様々な工夫をしている。この動物小説の特異な点は、Jamie Johnson も指摘しているように、単に擬人法を使って犬に語らせるのではなく、犬独自の意識を提示していることである。こうした犬の意識を表現するために、『フラッシュ』で重要な役割を担っているのが感覚表現であり、とりわけ「匂い」をめぐる表現である。Anna Feuerstein は、『フラッシュ』の中で、匂いの描写が犬独自の認識と密接に関わっていることを示唆しているが、実際にフラッシュの思考は、匂いにより構成されていると言ってよいだろう。

さらに『フラッシュ』の匂いの描写は、ウルフの文体実験とも密接に関係している。近年、デリダの動物論を皮切りに、動物小説に関心が高まる中で、『フラッシュ』も再評価されてきている。しかしながら『フラッシュ』の匂いの研究は、Anna Feuerstein によるものがあるが、この中では匂いの描写とウルフの文体実験との関りについて言及されていない。したがって本稿では、『フラッシュ』の匂いの描写に注目することで、匂いを描くことで新しい文体表現をしようとするウルフの小説における実験性について明らかにしたい。

2. 視覚 vs 臭覚

ウルフは人間と犬の知覚手段がいかに異なるかを提示するために、バレット嬢とフラッシュの姿を鏡像のように類似したものとす一方、両者の差

異を際立たせている。両者には「似通ったところがあり」両方とも大きな明るい目をしていて、大きな口をしている (18)。こうした見た目の類似に加え、Squire や Flint や Feuerstein らが指摘しているように、フラッシュとバレット嬢には、ペットとヴィクトリア朝時代の女性という社会的弱者としての立場の類似がみられる。例えば犬は、ペットとして首輪と鎖につながれ自由に行動することができない。バレット嬢も女性であるために、行動範囲が制限され、自由に行動することができないのだ。そのため犬同様に女性たちもヴィクトリア朝の性規範という「見えない鎖」につながれ、自由を奪われている。フラッシュとバレット嬢はお互いを見て「ここに私がいる」と感じ、見た目や立場の類似から共感しあっており、強いきずなで結びついているのだ (18)。

しかしフラッシュとバレット嬢には大きな違いがあり、「両者の間には隔てる大きな溝」があったのだ (18-19)。それはもちろん「彼女は女性で、彼は犬だ」ということであり、「彼女は話せるが、彼は話せない」ということである (19)。さらに両者の大きな違いは、知覚手段の違いである。

Beauty, so it seems at least, had to be crystallized into a green or violet powder and puffed by some celestial syringe down the fringed channels that lay behind his nostrils before it touched Flush's senses; and then it issued not in words, but in a silent rapture. Where Mrs Browning saw, he smelt; where she wrote, he snuffed. (85)

彼女が「見るところを、彼は匂いをかぎ、彼女が書くところを彼が匂いをかぐのだ」(85)。このようにバレット嬢が視覚情報により知覚する一方で、フラッシュは匂いにより知覚している。そして「愛」や「宗教」「美」などの思想もまた「鼻の奥の鬚のついた管を通して」知覚されるのである。

両者の類似にもかかわらず、こうした知覚手段の違いのために、両者はお互いを理解することができない。例えば一緒に飼われている犬が骨付き肉を遠くの部屋でもらったことを匂いから察知したフラッシュが突然吠えている

理由が、バレット嬢には分からない。一方フラッシュも執筆中のバレット嬢がなぜ突然泣き出したり、笑いだしたりするのかいくら耳をそばだて、匂いを嗅いでも分からないのだ (26-27)。お互いが同じ言語で会話することができず、意思疎通が取れないことに加え、こうした知覚手段の違いのために、両者の間には誤解や不理解が生じてしまう。

注目すべきは、フラッシュの知覚手段は、バレット嬢の教育により、視覚による知覚手段に変わっていくことである。ミットフォード家で本能のままのびのびと育ったフラッシュは、バレット嬢の「寝室での教育」によって、「最も激しい彼の自然の本能を断念し、押さえつけ、押し殺す」ことを学習し (25)、吠えたり唸ったりする「犬のたくましさ」よりも「猫の静けさ」や「人間との共感」を好むようになる (32)。そして教官であるバレット嬢への愛情の証として、「世界全体は自由であるにも関わらず、彼女の側に横たわるためにウィンポール・ストリートの匂い全てを奪われることを選ぶ」(26) のだ。

フラッシュの「能力をさらに高め、教育する」ために、バレット嬢は、見たものを分析し、その本質を見抜くことを教える (32)。例えばバレット嬢は、鏡の前にフラッシュを立たせ、自分自身を見つめ、自己とは何か考えさせる (32)。このような「見ること」を通して得られる視覚情報によって考えるというバレット嬢の教育は、実を結ぶことになる。そしてのちにフラッシュは、バレット嬢の観察者としてバレット嬢の仕草、表情を読み取り、家族が誰もバレット嬢の変化に気づいていないにもかかわらず、ブラウニング氏との逢瀬がバレット嬢に与える内面の変化を正確に理解するのだ。

このようにフラッシュは、バレット嬢の観察者となり、彼女の動作を観察し、視覚により他者を把握することを学習している。しかし視覚による鋭い観察力を身に着ける一方で、フラッシュは、人間社会の視覚中心的な価値観によって縛られてしまう。そうした価値観によって影響を受けたものが、人間社会の視覚中心主義に影響を受けたロンドンの犬の社会の階級制度である。ロンドンのウィンポール・ストリートに引き取られ、住むうちに、フラッ

シュはロンドンの犬たちの中には、厳密に分かれた階級があることに気づく。

注意すべき点は、犬たちのこうした階級を分ける基準が見た目による人間によって作られた視覚重視の尺度に基づいているということである。例えばフラッシュの犬種であるスパニエル犬の優劣を決めるスパニエル・クラブという団体が存在し、人間の審査員たちによる犬を識別する規定が定められている。

The merits of the spaniel are equally clearly defined. His head must be smooth, rising without a too-decided stoop from the muzzle; the skull must be comparatively rounded and well developed with plenty of room for brain power; the eyes must be full but not gozzled; the general expression must be one of intelligence and gentleness. The spaniel that exhibits these points is encouraged and bred from; the spaniel who persists in perpetuating topknots and light noses is cut off from the privileges and emoluments of his kind. Thus the judges lay down the law and, laying down the law, impose penalties and privileges which ensure that the law shall be obeyed. (7)

このスパニエル・クラブの規定には、劣った種を排除し、優れた種のみを繁殖させようとする優生学の影響が見られ、その優れた種としての判断基準となっているのは、犬の見た目である。良いスパニエルは、毛並み、頭の形や目の色や形がよく、優れた表情が求められる(7)。そして「こうした美点をすべて兼ね備えたスパニエル」は種をはぐくむことができるが、そうでないものは、スパニエル・クラブの「法」によって罰せられ、「特権と報酬を打ち切られ」種を残すことができず、淘汰されてしまうのだ。グレイハウンドは王族、スパニエルは紳士階級、ハウンドは地主階級と人間の階級制度に例えられた犬の品種による階級に加え、犬の見た目による優劣により階級的な位置づけが決まる。そしてもともと人間たちが定めたこの見た目による判断基準は、犬たちの社会に浸透している。

ロンドンの犬たちには階級による違いがあることを知ったフラッシュは、

家に帰るとすぐに、自分の姿を鏡に写し観察し、階級的な位置づけを確認しようとする。

Flush knew before the summer had passed that there is no equality among dogs: some dogs are high dogs; some are low. Which, then, was he? No sooner had Flush got home than he examined himself carefully in the looking-glass. Heaven be praised, he was a dog of birth and breeding! His head was smooth; his eyes were prominent but not gozzled; his feet were feathered; he was the equal of the best-bred cocker in Wimpole Street. He noted with approval the purple jar from which he drank — such are the privileges of rank; he bent his head quietly to have the chain fixed to his collar — such are its penalties. (23)

フラッシュは鏡を通して、自分が「ウィンポール・ストリートで最良なコッカー・スパニエル」であることを見て取るのだ。幼児が鏡を通して自己を認識し、社会化する過程は、ラカンにより「鏡像段階」と名付けられている。フラッシュの幼少期のこの場面でも、鏡像が、フラッシュにはじめて自己認識させる役割を果たしている。そしてこの視覚による自己認識を経て、フラッシュは、社会化されるようになるのだ。

さらにフラッシュは、階級制度の仕組みについても理解していく。最良の階級にある犬の特権とは、安全な場所で「紫色のかめで水を飲む権利」などの生活の保証であり、その代償となるのは「鎖と首輪」に縛られることである。この代償を払わないで外に出ると、フラッシュがされたように盗賊たちに貧民窟へと誘拐され、命の危険にさらされてしまうのだ。このようにロンドンの犬社会の階級制度は、スパニエル・クラブの規定や特権と罰によって機能しているのだ。

3. 「匂いの世界」

視覚による観察力を身に着けたフラッシュであったが、階級制度などの人

間社会に影響を受けた視覚中心主義に基づいた価値観は、犬本来の本能を抑制し、自由を奪いフラッシュを縛る「見えない鎖」ともなっていた。実際にフラッシュは、視覚による知覚を手に入れるのと引き換えに、犬の本能として備わっていた臭覚や聴覚などの他の五感による知覚を抑圧されてしまうのだ。しかしフラッシュが成犬になった後、再び犬本来の本能を取り戻し「匂いの世界」に回帰していくことになる。これは、パレット嬢がブラウニング氏とイタリアに駆け落ちした後、フラッシュもイタリアに住むことになり、イタリアの犬社会がフラッシュに大きな変化を与えたためである。

ロンドンの犬の社会とは異なり、イタリアの犬たちは全て「雑種」と見なされ、見た目や階級により区別されず平等である。フラッシュは最初、雑種の群れの中の唯一の貴族であるかのような孤独感を感じていた。しかし徐々にイタリアの犬の社会に溶け込んでいく。さらに高貴な血統の証である豊かな毛を失ったことも、フラッシュの階級意識を薄れさせることとなる。フラッシュは、強力な蚤にたかられたため、ブラウニング氏に毛を刈られ、自らの毛という階級の衣を失う。それにより彼は、イタリアの雑種犬の一員となり、階級制度という視覚中心的価値観の呪縛から解き放たれるのだ。²

鎖と首輪でつながれ自由を奪われたロンドンの生活とは異なり、イタリアでは、犬は鎖につながれることなく外を自由に飛び回ることができる。「彼の人生で最も充実していて最も自由で幸せだったこの時代に、フラッシュにとってイタリアとは次々に漂ってくる様々な匂いのことだった」(86)とあるように、フラッシュは、こうした開放的で自由な環境の中で、本能のままに匂いの世界を満喫している。

Yet it was in the world of smell that Flush mostly lived. Love was chiefly smell; form and colour were smell; music and architecture, law, politics and science were smell. To him religion itself was smell. (86)

「匂いの世界」を生きるフラッシュにとって、愛や音楽、建築、科学、政治、

宗教は全て匂いから構成され、匂いによりそうした思想が形成されているのだ。

このようにフラッシュは、イタリアでの匂いの世界に浸り、匂いにより知覚することで、人間社会の視覚中心的な価値観とは異なる、犬独自の思想世界を謳歌している。Flintは、ウルフが『フラッシュ』を通して「人間と動物の間の伝統的な階層を崩そうとしている」(xxv)と述べている。ウルフは、人間世界の視覚中心主義と犬の匂いの世界を対比させ、豊かな犬の匂いの世界を描き出すことで、動物と人間の間の優劣を解消し、人間中心主義に異議を唱えている。³

4. 匂いを嗅ぐ、匂いを書く

バレット嬢とフラッシュを隔てていた人間と犬の知覚認識の溝を埋めるために、ウルフは『フラッシュ』で匂いを書きとることを試みている。それが人間の言語と文字による視覚認識と犬の臭覚認識を融合することで提示された、「匂いの世界」を生きる犬独自の思考の文体表現である。例えばフラッシュがロンドンで階級意識を持ち、社会化される以前の場面で、フラッシュの匂いによる知覚が鋭利に描かれている。

But again it was the smell of the room that overpowered him. Only a scholar who has descended step by step into a mausoleum and there finds himself in a crypt, crusted with fungus, simply with mould, exuding sour smells of decay and antiquity, while half-obliterated marble busts gleam in mid-air and all is dimly seen by the light of the small swinging lamp which he holds, and dips and turns, glancing now here, now there — only the sensations of such an explorer into the buried vaults of a ruined city can compare with the riot of emotions that flooded Flush's nerves as he stood for the first time in an invalid's bedroom, in Wimpole Street, and smelt eau-de-Cologne. (16)

この場面で、初めてバレット家にやって来たフラッシュは、バレット嬢の

部屋に降り積もった匂いの層に圧倒されている。そして彼は、かび臭い古い霊廟を発掘する学者のように、匂いの地層をかき分け、その中でバレット嬢の身に着けているオーディコロンの香りを嗅ぎ取る。さらに貧民窟に誘拐された時、フラッシュは、このバレット嬢の部屋のオーディコロンの香りを「はっきりとしたイメージ」として思い出すのだ (58)。このように匂いとフラッシュの記憶は、密接に結びついている。

さらに実体を持たないこうした匂いを表現するために、ウルフは、臭覚を他の感覚と混ぜ合わせ、匂いに実体を与えている。

He nosed his way from smell to smell; the rough, the smooth, the dark, the golden. . . he ran in and out, always with his nose to the ground, drinking in the essence; or with his nose in the air vibrating with the aroma. . . He devoured whole bunches of ripe grapes largely because of their purple smell; he chewed and spat out whatever tough relic of goat or macaroni the Italian housewife had thrown from the balcony — goat and macaroni were raucous smells, crimson smells. He followed the swooning sweetness of incense into the violet intricacies of dark cathedrals; and, sniffing, tried to lap the gold on the window- stained tomb. Nor was his sense of touch much less acute. (87)

ここでは熟れたブドウの香りは、「紫色の匂い」であり、ヤギの肉やマカロニは、「騒々しい匂い、真っ赤な匂い」(87)と表現され、共感的に臭覚と視覚、聴覚、触覚などを合わせて使うことで、ウルフは匂いに輪郭を与えている。

注目すべきは、匂いを表現することがいかに新しい表現の可能性を秘めているかをウルフが『フラッシュ』で明らかにしていることである。例えば、語り手はフラッシュの「感覚のどれ一つを取っても言葉によってゆがめられたことはなく」、「ラスキン」や「ジョージ・エリオット」を含む「これまでの人間も」「決して知らなかったフローレンスをフラッシュは知っていたのだ」(87)と述べ、匂いはじめとする感覚がいかにこれまで言葉で表さ

れてこなかったのか指摘している。

さらに人間の言葉では、「私たちが嗅ぐ匂いについては、2語か1語半しかない。特に人間の鼻は存在しないようなものだ。世界の偉大な詩人たちでさえ、一方にはバラの花の匂いをもう一方には糞の匂いを嗅いだに過ぎない。両者の間にある数限りない匂いの段階は記されていない」(86)という語り手の主張は、従来の作家たちがあまり注目してこなかった臭覚などの感覚を表現することで、新しい表現方法を探っている作者の姿を暗示させるものである。

さらに匂いのような非言語的なものを言語で表現することは、女性たちの流動的な無意識を描くというウルフのモダニズム的な文体実験にも通じているように思われる。⁴ 『フラッシュ』では、匂いを言語化することで、人間とは異なる犬の意識を表現し、ウルフが「無名なものの人生」と呼ぶ社会の周縁にいるものの人生に光を当てている。さらにこうした「無名なものの」人生を描くことは、女性や動物たちを社会的弱者として排除してきた父権社会への批判でもある。このように『フラッシュ』での匂いを描く文体実験には、父権制度や人間中心主義への批判が込められているのだ。

注

*本論文は、日本英文学会関西支部第12回大会（2017年12月17日 於：京都女子大学）において口頭発表した原稿に加筆・修正を加えたものである。

- 1 ウルフがフラッシュのモデルにした愛犬のスパニエル犬 Pinker は、友人の Vita Sackville-West からウルフに贈られた。ウルフと彼女の飼っていた愛犬達との関りについては、Maureen や Flint が詳しく述べている。
- 2 これに加え、フラッシュとパレット嬢の関係の変化も、フラッシュの内面に影響を与えている。ブラウニング夫人となり、一児の母となったパレット嬢にとって、以前ほどフラッシュは重要な存在ではなくなり、フラッシュとブラウニング夫人の間の共依存関係は薄まっていく。そして夫や子供との関係や文筆活動を重視するブラウニング夫人を受け入れ、フラッシュもまた現地の犬たちとの関係を重視していくようになる。
- 3 Gillian Beer は、『フラッシュ』の匂いの働きの重要性について言及し、フラッシュが知覚する匂いから貧富の差などの階級制度の階層を嗅ぎ取っている（102-103）。
- 4 ウルフの感覚表現に注目した E・M・Forster は、ウルフは「野蛮なことをしながら

理想ばかり唱えているこの時代に、感覚の重要性を改めて教えてくれる」と述べ、感覚表現に込められたウルフの挑戦について評価している。フォースターは、ウルフの感覚表現の中で、食べ物を描く際の味覚や触覚の描写や聴覚の表現を取り上げており、父権社会での従来の視覚中心主義に対するものとして、視覚以外の「感覚の重要性」をウルフが提示していることを指摘している (121)。

参考文献

- Adams, Maureen. *Shaggy Muses: The Dogs who Inspired Virginia Woolf, Emily Dickenson, Elizabeth Barrett Browning, Edith Warton, and Emily Brontë*. Chicago: U of Chicago P, 2007.
- Beer, Gillian. *Virginia Woolf: The Common Ground*. Ann Arbor: U of Michigan P, 1996.
- Bell, Quentin. *Virginia Woolf: A Biography*, vol. 2. London: Hogarth Press, 1972.
- Feuerstein, Anna. "What Does Power Smell Like? Canine Epistemology and the Politics of the Pet in Virginia Woolf's *Flush*." *Virginia Woolf Miscellany* 84. Southern Connecticut State UP, 2013.
- Flint, Kate. "Introduction." *Flush*. New York: Oxford, 1998.
- Forster, Edward M. "Virginia Woolf." *Virginia Woolf: Critical Assessments*. Ed. Graham Clarke, Vol I. East Sussex: Helm Information, 1994. (「ヴァージニア・ウルフ」『フォースター評論集』小野寺健訳、岩波書房、1996年。)
- Johnson, Jamie. "Virginia Woolf's *Flush*: Decentering Human Subjectivity through the Nonhuman Animal Character." *Virginia Woolf Miscellany* 84. Southern Connecticut State UP, 2013.
- Squier, Susan Merrill. "Flush's Journey from Imprisonment of Freedom." *Virginia Woolf and London: The Sexual Politics of the City*. Chapel Hill and London: U of North Carolina Press, 1985.
- Woolf, Virginia. *The Letters of Virginia Woolf*, vol. 5. Ed. Nigel Nicolson and Joanne Trautmann. London: Hogarth Press, 1979.
- . "Lives of the Obscure." *The Common Reader*. New York: Harvest, 1984.
- . *Orlando*. New York: Oxford UP, 1992.
- . *To the Lighthouse*. New York: Oxford UP, 1992.
- . *Mrs Dalloway*. New York: Oxford UP, 1992.
- . *Flush*. New York: Oxford UP, 1998. (『フラッシュ』出淵敬子訳、みすず書房、1993年。)
- ジャック・デリダ『動物を追う、ゆえに私は(動物)である』鶴飼哲訳、筑摩書房、2014。

